

That's きつとす 令和2年4月

江戸時代の彗星

4月といえば、天文好きな人にとっては「4月こと座流星群」が毎年見られることで有名な月ですね。そこで今回は、江戸時代に書かれた日記から天文、特に彗星に関わる記事をご紹介します。

小瀬戸村の須田精堂という人が書いた「須田家日記」には、日記が始まる天保14(1843)年から江戸時代が終わる慶應4(1868)年までの間に、以下の3件が記されています。

①天保14(1843)年2月17日「未申ニ當リ天ニ永ク刀如ク雲出西ノ方ニ入、柴(ママ、「此」カ)ハ星ナリ」

②安政5(1858)年8月24日「西ノ方ニ(凶)此ノことく星出ル」

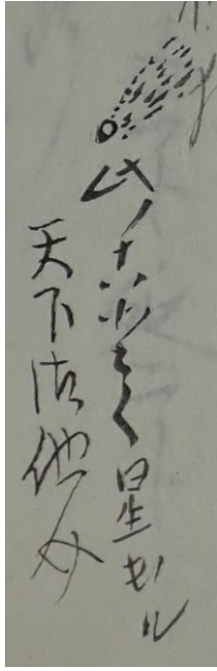
③万延2(1861)年5月28日「戌ノ方上天江(凶)此ことくニ星出る」

①は、この年の2月から4月にかけて世界中で観測された「1843年の大彗星(C/1843 D1)」を指していると思われます。この彗星は少なくとも1億5千万km以上ある大変長い尾を持ち、地上からは空に50°以上にわたってのびているのが見えたといえます。そのため、上記のように尾を「雲」と称した記録が各地に残っています。

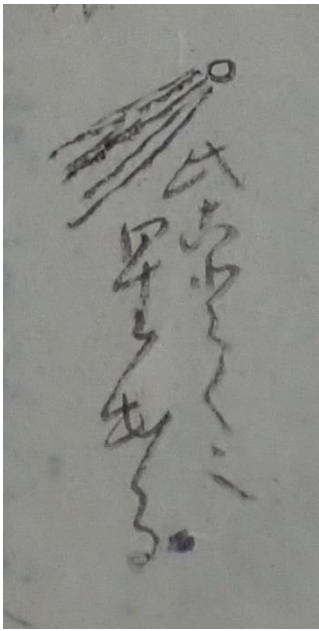
②は、19世紀に観測された彗星の中で最も輝かしいとされているドナチ彗星(C/1858 L1)と考えられます。この彗星は、世界で初めて写真に撮られた彗星としても有名です。

③は、非常に明るかったといわれているテバット彗星(C/1861 J1)のことだと思われます。その明るさは1等星から-2等星ともされ、昼間でも容易に見えるほどであったようです。

3件のうち、②と③には凶が描かれています。尾の向きが違うのはもちろんのこと、尾の形状も良く見ると描き分けてあるのがわかります。また、記述の中で注目したいのが②のすぐ横に書かれた「天下御他介」の文字です。ここでいう「天下」とは江戸幕府の将軍を指しますが、この年の7月に第13代将軍徳川家定が死去しています。彗星は古くから凶兆とされてきたため、精堂も将軍の死去と彗星の出現を結び付けて考えたのかもしれませんが。これらの記事はいずれも短いものですが、江戸時代の人の彗星観が垣間見えるような気がします。(金澤)



彗星②の画像と、「此ノことく星出ル」の文字



彗星③の絵と「此ことくニ星出る」の文字